

随想

この先切符は無効

吉倉 廣

名誉会員

この題は、Roman Gary の小説のタイトルである。彼は若いジーン・セバーグと結婚したが、彼女は自殺。彼が二度目のゴンクール賞を受賞したのは私がパリにいた頃である。この賞は若い小説家の登竜門で、彼はこれを受賞していて、2度は応募出来ない。そこで、エミール・アジャーと言う偽名で受賞した。「これからの人生」という少年の物語である。甥を作者に仕立て上げ、「作者」がランニングしている写真が週刊誌に出た。小説は爆発的に売れ、彼は後で経緯を書いたが、「著者」の甥に対し嫉妬を感じ、文体を見れば自分のものと直ぐ分かるのにと書いている。何故偽名を使って迄ゴンクール賞に応募したかであるが、小説が売れるのは、小説そのものの評価ではなく、自分の名前が売れている為ではないか、と疑問を抱いた為だという。対談の中で自分は年を取らないと言っているのだから、作家としての自分の老いを受け入れられなかったのかも知れない。ジーン・セバーグの死の翌年、彼女の死とは関係ないと書き残しつつ、拳銃自殺した。老齢をテーマにした小説としては、フィリップ・ロスの *Patrimony* や *The dying animal* が好きである。厳しかった父親が若い女性と結婚する、その女性から或る日電話が掛ってくる、兎も角来てくれと言うので行くと、女性はおらず、父親がバスタブに下半身裸で立っていて、うんこだらけで泣いている。フィリップ・ロスの小説は、会食で偶々隣り合わせになった Varmus が教えてくれた。

上の文章は、編集部から随想執筆津の誘いがある、書き始めたものである。日本人の最多死亡年齢（平均余命ではない）は20年間に10年延びている。加齢は人々の人生観を変え、国或いは世界の政治経済を変える。高等学校の

時に学園祭で「崑崙山の人々」と言う劇をやったが、仙人達は死のうとして首を切っても、頭がすぐ首に戻ってしまっ、どうしても死ねない。どうして飯沢匡があ頃あの劇を書いたのか不思議である。

私は西太平洋地区事務局（Western Pacific Regional Health Organization, WPRO）のTAG（ワクチン予防可能疾患技術諮問会議, Technical Advisory Group）にここ何年か出席していて、昨年今年WPRO事務局長交代に重なり、議長を代行した。会議の事務責任者は、ワクチン予防可能疾患に関して長い経験を持つ高島さんである。

TAGの第一回会議は1991年に東京で開かれ、天然痘撲滅に貢献した蟻田先生が議長をされた。主なテーマは天然痘撲滅に続くポリオ根絶計画で、当時私は偶々国立予防衛生研究所（予研）の腸内部長を併任していたので出席した。一方、JICAが既に中国のポリオプロジェクトを計画していて、1989年の冬北京に、外務省、JICAの方々をRDを結びに行った。大雪で湖のそばの暖房のない由緒ある建物であった。その年6月に天安門事件が起こっていて、立ち上げは困難とされていたが、ともかく発足した。国立国際医療センターの千葉康男先生、国立予防衛生研究所（予研）腸内ウイルス部の原稔先生が中国に渡り、長期専門家として働かれた。プロジェクト開始後5年目1995年には、中国からポリオが消えた。その経過はJICAの出版物として見る事が出来る。

昨年と今年のWPROのTAGであるが、難題は、ポリオ根絶、麻疹消除計画である。ポリオの方であるが、野生株は、もう一息の処で、WHO南東アジア地区のアフガニスタン、パキスタンで頓挫している。パキスタンにはJICAの千葉先生の調査に同行した。プロジェクト候補地は、出雲の奥に似ていて、担当者も熱心で、ここなら上手く行くと思った。しかし、オサマ・ビン・ラデン暗殺にワクチン接種者が巻き込まれ、今は手が付けられない。西太平洋地区での問題は主にワクチン由来ポリオウイルス（Vaccine derived poliovirus, VDPV）である。予防接種で投与された生ワクチン株（OPV）が、被接種者の糞便と共に排出され環境水更に飲料水を汚染し、再び飲料水から又人の腸管に入り増えて糞便と共に排出され、麻痺患者が出るという問題である。問題は、これに不活化ワクチン（IPV）で対応するか、OPVで対応するか、である。IPVは発症を

連絡先

〒162-8640

東京都新宿区戸山1-23-1

国立感染症研究所 エイズ研究センター

TEL: 03-5285-1111

FAX: 03-5285-1150

E-mail: yoshikura@nih.go.jp

抑えるが、粘膜免疫を誘導しないので患者は減ってもVDPVは増え続ける。OPVを続ければVDPV候補ウイルスを供給し続ける事になる。

ポリオ生ワクチンは、Sabin 1型, 2型, 3型の混合ワクチンで、今、西太平洋地区で問題になっているのは2型由来の株(vaccine derived polio type 2)である。平成8年の日本ポリオ研の報告(森本, 阿部, 橋爪: 日本感染症学雑誌 71巻第4号 307-312頁)に依ると、OPV投与後、1型は28日間、2型は39日間、3型は36日間便中に排泄され、投与後の時間と共に便中のOPVのrctマーカー(温度感受性マーカーで高温での増殖能と毒性が相関)が強毒側に变化するが、その変化は2型3型が大きい。要するに、流行中のVDPV2の由来するワクチン株は、腸管の高い温度で長期増殖し、強毒株が出易い、と言う事である。現在VDPVが出ているパプアニューギニア、フィリピン、中国の流行地は糞口感染を容易にする上下水道も揃っていない貧困地域で、強毒VDPVが流行し優位になる好条件が揃っている。橋爪(本誌51巻1号101-104頁, 2001年)は、抗体価分布で見るとOPVの人から人への伝播は2型ワクチン株に多く1型、3型は少ないとの記載しており、これも、流行株がVDPV2である事と平仄が合う。従って、WPROのVDPV2流行は起こるべくして起こっている。不活化ワクチンか生ワクチンかと謂う問題設定は恐らく当を得ていない。流行の場が限られているので、ポリオのワクチンプログラム全体の問題としてではなく、流行地の糞口感染対策、上下水道対策も考えないといけない。さもないとポリオ根絶はendless gameになる。

麻疹の方は、2002年にWHO米大陸地区(Pan American Health Organization, PAHO)が麻疹の消除(国内伝播阻止)に成功したのを受け、西太平洋地区でも2003年に麻疹消除計画を採択した。TAGは、筆者は最初の2回目迄出席し、後は感染研の宮村所長が引き継がれたが、退官と同時にTAG副議長も辞退されたので、20年近い空白の後、私がこれを引き継いだ。麻疹消除計画については蟻田先生もその実現性に懸念を示されていたと聞いていたが、現状は将に先生の懸念通りである。PAHOは2002年に麻疹消除に成功したにも拘わらず、2013-2015に麻疹の大流行を経験し、WPROは、韓国、オーストラリア、ニュージーランド、カンボジア、日本等の麻疹消除を認定したものの、麻疹の流行は続いている。原因は麻疹流行国からの輸入と、小児期に麻疹を経験していない、或いはワクチン接種を受けそとなった年長者患者の増加である。日本の2017-2018年の統計を見ると7割が19歳以上、患者の4分の1が予防接種を受けた修飾麻疹である。現在の予防接種対象年齢の予防接種だけでは麻疹消除は完遂出来ない。

麻疹が人口数に依存する事は古くから知られているが、日本の都道府県の麻疹患者数と県人口の関係を見ると、都道府県当たり患者数は県人口の2乗位に比例しており、

2016-2017年には麻疹ゼロが15県ありその総人口数は20,075千人、これに対し、患者数41の東京の人口数は13,515千人、大阪は患者23人に対し人口8,839千人と、人口の集中する都道府県への患者の集中が見られた。面白い事に、麻疹消除認定後の2017年には、山形県の53人、三重の22人の様にそれ迄患者の少なかった県に大きな流行が起こった。全て輸入例で、それ迄流行の無かった地方では、麻疹が流入すると其処で大流行が起こり得る状況を示唆する。これらの地方では、自然流行による集団免疫が低かった可能性がある。似た現象は、Panum, Black, Bartlett等が島の麻疹流行につき既に記載している。過去10年間に進んだ経済のグローバル化は桁違いに多数の人々の国境超えた動きを可能にし、富の集中、人口の集中と共に麻疹の流行を助けている。

麻疹の宿主は人だけなので、マラリアの様なベクターの問題がない、ポリオの様な無症候例が無く必ず患者は見つかる、流行株は単一株である、ワクチン接種で感受性の人達を無くせば麻疹は消える、それで、消除計画は成功する筈であった。消除計画をやって見て初めて人間がベクターである事が重要な問題である事に気付いたと思う。麻疹消除を今後どう進めるかであるが、従来の麻疹消除の基準は、「国内伝播の遮断」であるが、この基準は日本位までが限度で、北南合わせた米大陸よりも多い人口を抱える中国やインドにはこの基準は当て嵌らない。省毎の消除判定をすると言う提案もあるが、経済が人の移動を伴う事を考えると現実的でない。現在の基準は使える国には使い、人口大国には、その意見を入れ、人口が桁違いに大きい国にも使える基準を考えるのが一案である。TAGが今の消除基準に合意する時に、中国が逡巡し、麻疹消除計画が提案された時の1/1,000,000の方が増しだと私に漏らしたことがある。人口当たりの患者頻度を人口大国用に合わせて使うのも一案である。

私はポリオも麻疹も直接研究対象にした事はない。1964年インターンを終え、予研に就職し直ぐ、テミンのDNA合成阻害剤が鶏のRous肉腫ウイルスの複製を抑える事を、マウス白血病の系で確認したのが仕事の始まりである。当時テミンの実験は糞味噌にやられていて、私のこの実験もウイルス学会には出さなかったと思う。ただ、山のような文献請求が来たが、その殆どがソ連からで、ソ連通商代表部の人に夕食に呼ばれた。ソ連では獲得形質遺伝のルイセンコ学説が政治的な力を持ち、世界的に有名な植物遺伝学者のバビロフがシベリアに流され死んだ時代である。RNAゲノムを持つウイルスがDNA合成を介して増えると言うのは遺伝情報の逆流、獲得形質の遺伝に通じ、テミンの仮説への批判にはこの背景があったのではないかと思う。FAO/WHOの食品基準委員会の組み換え食品特別部会の議長をした関係で、厚労省の食品安全部で非常勤公務員に採用して貰い、昨年春迄お世話になった。私の持っている切符はそろそろ無効である。